

書評

川田順造
編 『口頭伝承の比較研究』第一巻
柘植元一

福田 晃

(一)

昭和五十七年から四ヶ年間、編者の一人である川田順造教授を研究代表者として、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクトの一つ、「口頭伝承の比較研究」のための研究会が催された。それは、年四回の例会に、それぞれ共同研究者数名の口頭伝承に関する研究報告にもとづく討議によるものであった。しかし、この研究会の掲げる「口頭伝承」は、一般の言語伝承に留まるものではなく、人間の行為の全般、すなわちパーホーマンスに及ぶものであり、そこに「ことば」の意味を読みとるものであった。したがって、その報告は、文芸・音楽・絵画にまたがり、文明社会の伝承から未開のそれに及んで、従来の口承文芸研究の枠を越え、人間の文

化の本質をとらえるという、きわめて可能性豊かな共同の研究会となっている。

本書は、その研究会の第一回から第四回までの報告をもとにして成った十編を収めるものである。

(二)

その第一のパートは、「口頭伝承の生成」に関するもので、日本の伝承から野村純一、山本吉左右の両氏、アフリカの伝承から川田順造氏が執筆している。

その野村氏の論放は、「話の行方——『口裂け女』その他——」と題するもの。まず狂言『成上り』のなかで紹介される「くちなわ太刀」と山形・新庄市の安食家に伝わる現代のそれの例をあげて、「話」が時・処あるいは家・人を得て「伝説」に生成されてゆくことを説く。次いで、「くだん」とい

う半人・半獣の噂話を九州西端の島々の伝承からとりあげ、「件」の「文字由来」をいう兵庫・播磨のそれと比べて、単なる話としての「件」の怪物伝承が、土地の人々の日常生活に働きかけ、ホウソウ神の如き古風なそれに生成されることを明らかにする。そして本稿の中心話題である近年の世間話「口裂け女」に及んで、「口裂け女」のモチーフを習合する山形・上市市の「喰はず女房」の伝承例をあげ、およそ四年間に及ぶ「口裂け女」の示例を北海道から沖縄に至る地域からのものをあげて、その迅速な伝播のなかで、ついには、それが伝統的な心意伝承に沿い、あるいは昔話伝承の類型に従って生成されることを究明する。きわめて把握しがたい口頭伝承の伝播・生成の過程をあざやかに切り開いてみせた論放である。

次の山本氏の論放は、「伝説生成の一形態——鳥羽田龍含寺小栗堂縁——」と題するもの。常陸小栗氏の本拠から遙かに離れた茨城郡鳥羽田に伝わる小栗判官伝説生成の過程を、詳細な実地踏査と刻明な史料解説によって究明するものである。すなわ

ち、それを論述の逆にあげると、その伝承の直接的契機は、当地に小栗氏支流の鳥羽田氏があり、それと鎌倉時代の徳治二年造立の阿弥陀仏を本尊とする真言寺院の龍含寺とかかわることによるもので、説経節「小栗判官」の流行のなかで、龍含寺はあえて江戸に「出開帳」をおこなって、その伝承を宣伝し、時宗遊行の四十一代の独朗上人も、あえて龍含寺に赴き、小栗伝承を唱導するなかで生成されたということになる。しかも、その小栗伝承は、当鳥羽田村の社会的状況と相まって、神話的過去に属する意義を有するものと説かれる。それは、山本氏が冒頭に「信仰・神霊・聖地といった語を用いて説明するのを意図的に排除しながら考察を進めたい」とことわるごとく、従来の伝説研究が柳田国男の唱導に従って民間信仰論に傾いてきたこととちがって、近世社会の文化状況に沿った伝説生成の固有性を明らかにすることに成功していると言える。

このパートの最後の川田氏論文は、「呼びかける歴史、物語る歴史——無文字社会における口承史の形成——」と題するもの。

われわれは、すでに川田氏の『無文字社会の歴史』（岩波書店、昭和五十一年）によって文字社会と次元の大きく違う伝承体系の存在を知らしめられたのであるが、本稿もその延長のなかで、西アフリカ内陸・モシ王国南部のテンゴ王朝をめぐる口頭伝承のなかのナロータ（代々の王についての伝承、つまり権力者の正史）を対象として論究されている。すなわち、それは、農作業の集中する雨季の最後に、最高首長の王自らがおこなう「かりいれ」の祭儀バズガにおいて、特定の職能者によって伝承されるものであり、その「くに」の新年のはじめに「王の系譜」が広報化されることで、一般民もまた、その「王の家々」のナロータに代表される深い過去を担って、年ごとの循環的な時間を生きているという意識をいだくというものであった。そして、そのナロータは、臨席している王に向かって、楽師が呼びかける形をとって朗読されるもので、まず現王とその生母を讃え、次の年が来ることを祈願する反復句のあと、楽師は「あなたの祖先は誰か」と現王に問いかけ、「あなたの祖先はX」と自答し、つづいてX

の戦さ名を呼び、再び親王とその生母を讃え……ということをくりかえしたのちに、次の王の名を呼び、順次、祖先の名を呼んでゆき、朗読はおわる。つまり祖先の名を次々と呼ぶことの全体が現王の名を呼び讃える行為を意味するもので、それはとりもなおさず始祖以来の祖先の名によって現王を「名づける」ことであった。およそモシ族の戦さ名は、生れたときに他人から与えられる個人名に対して、成人したとき本人が選んで自分自身に与える成人名を意味して、個としての自我を指示するもので、自己誇示的なものが多く、戦さや争いごとに際して勇気を鼓舞し、相手に力を威示する機能を有するものである。が、最高首長である王や、さまざまなレベルの首長には、位についたときの即位名があり、これが一般の戦さ名に当るもので、いずれも寓意による様式化された表現をとる。すなわち、かのナロータは、その一連の「戦さ名」が、祭儀の会衆の前で、数キロ四方にとどく太鼓バンドレの音、またそれを翻訳する楽師によって大声で朗読され、現王に呼びかけられるものである。そして、それは王に公

認された「正史」を上演することであり、それを王と会衆一同がともに聞くという行為のなかで、歴史が「現在し」「成立する」と言える。以上のごとく、ナロータを解明する川田氏は、さらに、その実演と伝承法を明らめ、その「正史」の構造を説き明かす。その論述は「太鼓ことば」という文字では表現しにくい対象のせいもあつて難解であるが、言語伝承にのみ歴史叙述を認めてきたわれわれにとっては、改めて衝撃的感動を抱かせるものとなっている。

右のように、三者三様、それぞれが、これまでの研究状況を打ち破る論攻である。

しかし、問題は、書名とかかわる「比較研究」である。あるいは、それは討論の場で論じ合われたことであろう。また、それは、第二巻の序に川田氏があげられるごとく、当研究会が「ゆるやかな学際的交流のなかから共通の問題を探つてゆく」というものであれば、直接的「比較研究」を志すものではなかったということであろう。しかし、学際的研究の集まりで、われわれは学問的視界の広がり豊かな可能性を感得する一方で、学際的研究の体系化の困難さに、し

ばしば大きな失望を抱くことである。この論集に抱く思いは、失礼ながら、それに近い。少なくとも「口頭伝承」をかかげるならば、それなりの「比較研究」は可能であるはずである。しかし、ここにあげられた三者の論は、それぞれを直接的に比較し得ないばかりか、「口頭伝承」の「生成」を間接的に比較することも、きわめて困難だと言えり。そして、それは、それぞれの「口頭伝承」のレベルが大きく違うことに起因する。たとえば、野村氏の論攻に沿うならば、山本氏には、その時間的比較としての近世社会における世間話変容の論攻が期待されることになり、川田氏には、その空間的比較としてのアフリカ社会における現代の「話」の論考が望まれることになろうし、野村氏自身には、日本における時間的比較にふれられておれば、たとえば「ヒッチハイクの女」など、近年、外国の各地をめぐる世間話への論攻が求められることになろう。また、山本氏の論攻に沿うならば、「出開帳」という都市と農村とを結ぶ近世社会の伝説生成の構図は、柳田国男のいう「唱導」「遊行」のヒジリなどによ

る近世以前のそれと比較される論攻が欲しいこととなる。あるいはまた、川田氏の論攻に沿うならば、たとえばアジアにおける「系譜伝承」との比較が有効であろうし、日本に比較を求めるならば、古代社会における語り部の「帝皇日継」、近世社会における祈禱師による正月の「系図読み」などの比較が可能となろう。つまり、「口頭伝承の比較研究」にあつては、対象とする「口頭伝承」のレベルを一定することが要求され、方法としての「比較研究」にも、時間的・空間的なその約束ごとが用意されないこと、学問としての実質的実りは果されないというのである。筆者の希望は、まさにないものねだりの感を免れないが、右のもの言いは、この〈生成〉のパートにとどまるものではなく、本書の全般に及ぶものであれば、あえて最初に掲げることである。

(三)

本書の第二のパートは、へいかに継承するか——ことば・文字・身振り——に関するもので、日本の伝承として徳丸吉彦氏、外

国のそれとして山口修・大谷紀美子両氏が執筆する。

その徳丸氏の論攷は、「音楽における『記されたもの』と『口で伝えられるもの』」と題するもの。まず洋楽における楽譜と実演とに異同があり、楽譜があっても、口頭で受け継ぐ音楽様式があり、演奏は「記されたもの」と「口で伝えられるもの」の双方に従っていることを説く。ついで、和楽の三味線音楽における「記されたもの」の意味を分析し、その機能の弱さを助けるものとして、「言葉」「三味線」「手の動き」を指摘し、それが音楽構造にパターン化をもたらし、口頭伝承と記憶を助けるものとなっていると説く。つまり、音楽伝承においても、「口で伝えられるもの」と「記されたもの」とは相補的役割を果し、それが次々と新しい音楽を生み出してゆくというのである。専門を異にする筆者には、理解し得ぬところもあるが、この論究を比較研究へ進めて、たとえば、三味線音楽以前の琵琶音楽なる平曲と平家物語とのそれをあわせてみる、あるいはさらに平家琵琶における相補的關係と盲僧琵琶における異同を

通してみるならばどうか、また第二巻でとりあげられた能楽のそれはどうかと比較検討が及べば、きわめて大きな成果が得られるものと推される。

山口氏の論攷は、「音楽の継承と歴史変化——ベラウ(バラオ)を事例として——」と題するもので、ミクロネシアの一部を占めるベラウの音楽文化のフィールド調査による歌謡分析。それは、クロダック(地方議會)がおこなわれる場合、その公的集会所バイでうたわれる集団歌謡の「集会歌エノルス」から個人歌謡の「準集会歌ドゥルベスベス」に及ぶものである。その集団歌謡から個人歌謡への歴史変容の分析は興味深い。が、ごく限られた資料と一年足らずのフィールド調査にもとづく論究は、かならずしも内面的分析に及んでいいるとは言えない。しかし、その比較研究を思えば、やはり大きな期待が寄せられよう。

大谷氏の論攷は、「インド古典舞踊の伝承と学習——バーラタ・ナーティヤムの事例——」と題するもので、インドにおける舞踊の伝承方法の一端を考察するもの。およそ南インドの代表的舞踊バーラタ・ナー

ティヤムの歴史を述べ、十九世紀後半、宗教的機能を失って卑俗化・卑猥化するなかで、最高カースト出身のルックミニ・デヴィ・アランディルらの力によって芸術的に再生して、今日、芸術学校のカラークシュトラを基盤として伝習されてきたという。そして大谷氏は、そのバーラタ・ナーティヤムの構造をあげ、カラークシュトラにおける学習の方法を述べる。つまり、当論攷は、インド舞踊の一つであるバーラタ・ナーティヤムの歴史と学習の特色を紹介するもので、比較研究とはほど遠いものと言わねばならぬ。

右のごとく、個々の論攷は、それぞれに意義あるものではある。が、すでに第一のパートで、その不満を述べたごとく、本書の標題にこたえるものとは言えない。特にここでは、音楽・歌謡・舞踊が「口頭伝承」の範囲に含まれてとりあげられたことに問題がある。たしかに、それは口頭伝承としての側面を含むものではあり、それゆえにこれまでの研究には及ばぬ視界は期待できるであろう。しかし、口頭伝承の主体は「ことば」であり、音楽の中心は「韻律的

音声〕であり、舞踊の眼目は〔パーフォマンス〕にあれば、すでに対象とする〔伝承〕のレベルに大きな異同がある。したがって、この三者間の直接的比較的研究は期待できない。しかも、このパートのタイトルに「へいかに継承するか」とあつても、論者の力点の置きどころが大きく異同して、読者のわれわれは、一種の不毛感におそわれる。ここでも、学際的比較研究への体系化が希求される。

(四)

第三のパートは「ことばのメッセージ・図像のメッセージ」に関するもので、日本の伝承として小澤俊夫・林雅彦両氏、ヨーロッパのそれとして若桑みどり氏が執筆する。

その小沢氏の論放は、「昔話にみられる隣モチーフ」と題するもの。それは、『日本昔話通観』の既刊一九巻のなから、対立的人物関係を設定する昔話全体をとりあげて、隣の爺を対立人物とする話型を検出する。それによると、その隣モチーフを含む話型は、単に隣の爺型の昔話にとどまら

ず、相当の話柄がこれによっており、かつ対照的人物も隣の爺に限らず、上・下、東・西、金持・貧者、兄・弟という関係によるものも多く、それも一定の地域的分布をみせる。すなわち、上・下を対立的人物関係とするものは、日本の北部と南部に限定され、東・西関係は九州にのみ見えており、金持・貧者関係は中国・九州・南島に、兄・弟関係は、南九州・南島に限られており、日本の中央部では、隣の爺、あるいは配偶者である婆が対立的人物として登場する。論者は、さらに右の分布調査の上について、日本の昔話のなかで、隣どうしの関心がいかに強いかを明らかにする。そして、隣モチーフの多用が、日本人の昔話の特徴であることを、韓国の対照的人物関係の語群や西アフリカやヨーロッパの話柄によって示す。しかし、問題は、隣モチーフを多用する日本の社会構造であろう。つまり日本の本土内におけるモチーフ分布の異同は、それによって説明されねばならないし、近隣諸国やアフリカ・ヨーロッパとの比較も、所詮は伝承社会の比較を通して試みられねばならないであろう。そして、そのような

比較研究は、昔話資料を伝承社会から切り取った『通観』ふうの昔話集成では不可能と言わねばならない。自らのフィールド・ワークにもとづくか、少なくとも伝承社会に密着した伝承報告書によることでなければならぬ。

林氏の論放は、「絵解きの世界——『野間大坊の絵解き放』への架橋——」と題するもの。まず従来の国文学界、その他の絵解きに対する無関心ぶりを説き、近年の絵解きの研究にあつて絵解きに台本なしとする説のあやまちを野間大坊「源義朝公御最期之絵図」の絵解きで反論する。それは、十二本に及ぶ絵解き台本などによって示されるものであれば、動かしがたい主張である。しかし、当研究会の期待するものは、その台本と実際の絵解きの関係論理であろう。

また、これでも比較研究にこだわれば、論者は、もはや国文学界への批判などを越えて、日本本土と近似した韓国・中国・台湾などの仏教・道教寺院の絵解き踏査とその比較研究に進むべきではあるまいか。

若桑氏の論放は、「伝達の媒体としての紋章」と題するもの。それは、十字軍に始

まる西欧の紋章について論述するもので、まずノイベッカーに従って、その歴史を紹介し、その「識別記号」「伝達的手段」「自己証明」としての機能を明らめ、その構造を分析される。が、その考察がどの程度、論者自身の独自なものかを判断する能力は、筆者にはない。また、このような象徴的図形が〈口頭伝承〉とかわかることは否定しないが、言語という異なった象徴体系である〈口頭伝承〉との比較は、どこで実現されるのかを思うと、それは所詮は人類学的課題に留むべきかと判断するものである。

本書の第四のパートは、〈伝承と創造〉をテーマとするもので、ここでは、柴田南雄氏の「民俗芸能・社寺芸能を音楽作品化する」の一つの論文をあげる。これは論題通り、筆者が民俗芸能・社寺芸能を素材として創作された八つの曲目、すなわち、(一)「追分節考」、(二)「万歳流し」、(三)「北越戯譜」、(四)「念仏踊」、(五)「修二会讚」、(六)「宇宙について」、(七)「布瑠部由良由良」、(八)「なにわ歳時記」について、体験的に紹介されたものである。が、この論攷の意義を論ずる能力は、筆者にはない。個人を越える物

差して文化をはかれば、これもいずれは比較研究へ寄与する論攷となるであろう。

(五)

以上、長々と本書の各論攷を紹介しつつ、勝手な寸評を試み、かつ、ないものねだりの期待を述べてきた。その叙述において推察されたと思うが、それなりに精読して見たものの、筆者の理解を越える論攷が多く、確な論評をなすことは困難であった。そして、これも、すでに述べたことであるが、本書には、大いなる期待を抱かせられながら、終始、大いなるいらだちを感じせしめられてきた。

おそらくそれは、従来の学問体系を否定しながら、本書にはいまだ新しい学問体系が明確化されていないからであろう。しかし、やがて当研究会の報告の全貌が公開されれば、その見通しは示されるにちがいない。ちなみに、手元にある第二巻、第三巻の目次を示せば、次のごとくである。

〔第二巻〕川田順造・柘植元一編

〈詩型とリズム〉

能の詩型とリズム（日本）／横道万里雄

アラブのリズム観——遊牧生活からの発想——（西アジア）／堀内勝

ベルシヤのリズム——韻律と拍節（西アジア）／柘植元一

〈伝承を生む者、運ぶ者〉

稲荷に捧げる歌——譬女とコンカイをめぐる——（日本）／福島邦夫

フルベ族のうたいものにおける人名（アフリカ）／江口一久

〈伝承、図像に過去を読む〉

聖なる島ボクナツの島名起源説話——説話からみる（オセニア）／小松和彦

中央アンデス先史時代の宗教伝承覚書（南アメリカ）／大貫良夫

〈伝承の文化的背景〉

象徴色としての青（ユーラシア、アフリカ）／柳宗玄

耳のイメージ論——「聴耳」考序説（日本）／村山道宣

〈口頭性と新しいメディア〉

西サモアにおけるハナシの諸形態とラジオ放送（オセニア）／山本真鳥

〔第三巻〕川田順造・山本吉左右編

〈かたること、うたうこと〉

〈かたること、うたうこと〉

「かたり」の位相について／坂部恵

「うた」と「かたり」の呪性（日本）／

古橋信孝

奄美のユタのクチ（呪詞）——「ことは」

と「うた」の関連を中心に（日本）／

山下欣一

〈声と身体のかたり〉

「うた」と「かたり」をめぐる音声様式

化の諸相——古代中世起源の日本伝統

音楽を中心に（日本）／広瀬美都

動作による「語り物」——パラタ・ナー

ティヤムの代表的舞踊（インド）／大

谷紀美子

古代ギリシア叙事詩『イーリアス』——

詩人と女神の対話（ヨーロッパ）／明

神聰

〈図像の説話性と象徴性〉

絵巻の空間——その図学的考察（日本）

／小山清男

図像と語り（日本）／藤井貞和

造形芸術における説話的表現と象徴的表

現——〈受胎告知〉の場合（ヨーロッパ）

パ）／若桑みどり

右のごとく、可能性を孕みながら、いま

だ「比較研究」の体系化は果されていない。

国際的にもユニーク性の主張できる学問体

系の構築を期待して、粗雑な書評を一応お

えることとする。妄言をお許しただきた

い。（ふくだあきら／立命館大学）

（A5版・三五八頁・昭和五九年十一月・

弘文堂・四八〇〇円）